

I believe that Americans respect the Japanese persons for their hard work, their serious work, and many times their technical expertise.

アメリカ人は日本人の方々の勤勉さと真剣な仕事ぶり、そして多くの場合、技術的な専門性に敬意を感じていると思います。

to respect ... for ~ ~について... に敬意を抱く、尊敬する

**やまと言葉** to respect のコアの意味は、「他よりも優れていることを尊敬する」というよりも、何よりも「その人やものの重さ(大きさ、価値、重要性など)をしっかりと認識して、大切に扱う (= 軽く扱わない)」です。まず、この点をしっかりと頭に置いておきましょう。

さて、ここでのように後ろに for が来る場合ですが、この場合には、for の後ろで「重みを感じている具体的な点」が言われるために、「他と異なる、その特徴や優れた点の面で、その人やものの重み感じ、貴重に思う」というより狭い意味合いになり、日本語で言う「尊敬する」に近い意味になるわけです。

**ロジック** 日本人駐在員に対する希望(アドバイス)がこの話のトピックですが、「こうしてほしい、こうするとよい」というアドバイス部分からズバット入るかたちで話を始めるのではなく、「アメリカ人社員が敬意を感じている点は...」とプラス側から始める典型的な話の組み立てになっています。to respect the Japanese persons for ~ と聞こえてきたところで、「あ、日本人駐在員についてのプラス側から始めてくれたな」ということを押さえ、同時に、「ということは、この後、きっと本格的なアドバイス部分がくるぞ...」と話の進む方向をある程度先読みする意識を持てるといいですね。

serious 真剣な

**やまと言葉** 日本語で言うと、口語的ですが「マジな」という表現がぴったりかもしれません。コンテキストによって「真剣な、深刻な、本気な」などの意味になります。

technical expertise 技術的な専門性

And, one of the things that is valued is if a Japanese person will take the time and the patience to clearly teach and communicate some of the technical skills that they have.

それで、ひとつ、ありがたいのは、日本の方が時間と忍耐をかけて、もっておられる技術をクリアなかたちで教えたり、伝えたりしてくださるとありがたいんです。

And それで...

**ロジック** 「プラス側」から「マイナス側(アドバイス・指摘部分)」への転換が、but だけではなく、and でくる場合にも慣れておきましょう。アドバイスですから、「マイナス側」で述べる内容がスピーカーのより言いたい内容なのですが、相手へのインパクトを意識して and... で「マイナス側」へ移ることによって、前に述べた「プラス側」にあくまでも“つけ足す”響きにしています。

one of the things that is valued is if... ありがたく感じられることのひとつは ...した場合です

**やまと言葉** valued は「価値を感じてもらえる、評価される、ありがたく思ってもらえる」の意味です。ここからが日本人駐在員に対するアドバイスなのですが、「~してほしい、~するべき、~した方がいい」という明確な言い方をせずに、「ありがたく感じられることのひとつは、...した場合である」という遠まわしな言い方でアドバイスをくれています。非常に遠まわしな言い方であるために、特にこうした言い回しに慣れていない日本人の私たちにはアドバイスだということにすら気付かない可能性があります。アドバイスを、「~してくれると、プラスになる (It would be helpful) / 感謝する (I would appreciate it) / ありがたく思われる (It would be valued)」といったやわらかい言い方でする場合もあることに、ここで慣れておきましょう。

to take the time and the patience to ... 時間と忍耐をかけて... してくれる

**やまと言葉** 直訳的な意味合いは、「...する時間と忍耐をちゃんとかける」で、「必要な時間と忍耐をかけて...す

る」といった感覚の意味になります。

the technical skills that they have 持っている技術

**パターン表現** 「名詞(the technical skills) + 修飾節」のかたちです。修飾節の情報「(彼らが)持っている」は、コンテキストからも十分に分かる情報ですが、英語では、日本語ならばあえて言う必要もないような、こうした詳しい情報が、このようにして(前からではなく) 後ろから足されてきます。ネイティブの感覚では、こういう当たり前で短い情報が後ろに付くのはよくある形なので、「名詞 + 修飾節」で、一息でとらえる感覚です。聞き取りのときには、あわてずに、ひとまとまりでとらえて処理できるように慣れておきましょう。

The style on how you teach is different for every person. One of the styles in Japan is on-the-job training. And very often a teacher will not give you clear teaching. They will let you try and fail and, and succeed on your own. That's one style.

教え方のスタイルというのは人によって違います。日本におけるひとつのスタイルは、OJT です。で、往々にして、先生は明確なかたちで教えないんですね。試行錯誤をさせて、自力で成功させます。これはこれで、ひとつのやり方ですね。

how you teach 教え方

**パターン表現** [what S + V] のかたちと同様に、[how S + V] の名詞のかたまり(名詞節) もよく使われ、これ全体でひとつの名詞、一単語の感覚です。[how S + V] で「~の仕方」、「~のやり方」と一単語感覚で意味を瞬時に取れるようにしておきましょう。ここも、how you teach 「あなたが教える、そのやり方」ということですから、「教え方」のような感じでスパッと瞬時に意味が取れるといいですね。

different for every person 人それぞれ

**やまと言葉** ...is different for every person は直訳的には「...はそれぞれの人にとって異なる」という意味ですから、「人それぞれ」という理解がぴったりですね。

**ロジック** the style on how you teach is ...以降は、「日本人駐在員の方には、持っている技術をクリアに教えてほしい」という「アドバイス」に対して、相手の頭に浮かびそうな反論を、「脱線」によって先取りしている部分です。アドバイスを聞いた相手の頭に浮かぶ可能性のある、「でも、何でもひとつひとつ教えることが一番いい教え方とは限らないんじゃない?」のような反論に対して、「確かに、教え方のスタイルは人それぞれだと思います」と相手の頭に浮かびそうな反論を先取りして言うことで、アドバイスされた聞き手が押し付けられた印象になることを避けています。

ここは、テキストで紹介したような「旗印」表現はありませんが、この...is different for every person 「人それぞれだ」という言い方が、メインポイントから「脱線」部分に移ったことをつかむヒントになります。自分の意見やアドバイスを伝える前に、「人それぞれだ = 自分のアドバイスが唯一のやり方、最善のやり方ではない、そういう前提で話していますよ」という言い方がよくされます。従って、...is different for every person. 「人それぞれです」と来たときに、「あ、脱線して前提を言ってくれているな。この後ろでアドバイス部分が本格的にくるぞ」という意識で聞き進みます。

one of the styles... ひとつのスタイルは...

**ロジック** The style on how you teach is different for every person. 「教え方のスタイルは人それぞれだ」と大きくくって言った後、**one of the styles...**と続けることで、その「人それぞれのスタイル」の内、その具体的なひとつを例として挙げる流れはよくある流れですので、慣れておきましょう。聞き取りでは、...is different for every person で、いくつかの例が存在しているイメージが頭に浮かんだ後、one of the...と聞こえてきたところで、その例のひとつにグーッと焦点が絞られていくイメージで聞くことができますといいですね。

on-the job training OJT

**慣用表現** 一般的に、OJT と略して言われます。従業員に研修や訓練の機会を与え、そこで育成するやり方に対して、実際に仕事をするを通して行う訓練、育成のことです。

often 往々にして

**やまと言葉** often を使って「～はよく...する」のように頻度を表す言い方です。一般論として話しているときには often が入ることで、「一般的な傾向」や「一般的によくなされること」のようなニュアンスが加わります。「よくあるのは...」、「往々にして...」のような感じです。

to try and fail 試行錯誤する

**やまと表現** 直訳的には「やってみて失敗する」という意味ですが、「挑戦しては失敗し、また挑戦してみることを繰り返す」様子を意味しています。やろうとしていることが、すんなりとは達成できないことを指していますので、日本語の感覚だと、「試行錯誤する」の感じがぴったりですね。

That's a very frustrating style for most Americans. Most Americans would like to be told what they need to do, and then to perform that task

で、これは、ほとんどのアメリカ人にとっては、非常にフラストレーションを感じるスタイルなんです。ほとんどのアメリカ人は、何をしなければならぬかをはっきりと言ってもらって、それでその作業を成し遂げるというのを好みますね。

That's... それって....

**口ジック** 直前に述べてきたこと that で受けて「で、それって～なんです」という言い方ですね。聞き取りでは、このような that が何を指しているのかをしっかりと押さえられるようにしておきましょう。

frustrating イライラさせられる

**文法** 辞書では「挫折感を与える」のような訳語になっていることがありますが、それよりは、「なかなかことがうまくいかないときに感じるような、イライラ、焦燥感、不満」が frustrating の感じですね。

That's a very frustrating style... それってとてもイライラするやり方なんです

**口ジック** That's a very frustrating...が、「脱線」から本論のアドバイス部分に戻ったことをつかむヒントになりますので、しっかりと押さえたいところです。

That's a very frustrating style for most Americans.「で、それ(OJT)ってイライラするやり方みたいなんですよ、アメリカ人社員にとっては」のように、「アメリカ人にとってよくないやり方だ」という言い方で本論のアドバイス部分に戻りました。この後に「具体的なアドバイス」が続く可能性が高いぞ...ということが予想できます。ここの流れもそのようになっていて、「具体的にアメリカ人はどういうやり方で教えてほしいのか」を具体的に説明してくれています。

what they need to do すべきこと

**パターン表現** 前出の [how s + v] と同様に、この [what s + v] もよく使われるかたちです。ここは、直訳的には「彼らがやる必要があること」の意味ですから、ひとかたまりで「やるべきこと」、「しなければいけないこと」のように処理できるといいですね。[what s + v] で「～なこと！」と一単語感覚で意味をつかめるように、このかたちに慣れておきましょう。

to perform 成し遂げる

**やまと言葉** 「完全に per 供給する form」というのが語源で、「出すべきものをきちんと出す」といった感覚がコアの意味になります。そこから、「やるべきことをきちんと果たす、達成する」といった意味で使われます。「やるべきこと」というのは「自分が役割や職責や義務としてやるべきこと」で、コンテキストから分かります。したがって、performance は、演奏家なら「(楽器などの)演奏」、会社という組織なら「(会社などの)業績」、社員なら「自分の仕事の成果」の意味になります。動詞 to perform が目的語をとって to perform a task となれば、その task で「やるべきこと」を「成し遂げる」という意味になります。

Cleveland is a wonderful, distinguished city that's done a lot of great things,  
 クリーブランドは素晴らしい、非常に立派な街で、素晴らしいことをやってこられた街であります。

distinguished 立派な

**やまと言葉** 「他と区別されるような」というのがコアの意味で、他のものや人から際立つような立派なものとして評価されていたり、有名だったりするときに使います。

...is a wonderful, distinguished city that's done a lot of great things

素晴らしいことをやってきた、立派な街だ

**パターン表現** 「名詞(a city) + 修飾節」のかたちです。a wonderful, distinguished city 「素晴らしい、立派な街だ」のようにまず言うておいて、どういう意味で「素晴らしく、立派なのか」を後ろから情報を足して説明をしてくれています。a wonderful, distinguished city と名詞 city の前に修飾が入っていることもあり、...city と聞いたところで一段落したと安心してしまいそうなところですが、英語は、このように後ろからどんどんと詳しい情報が足されてきます。常に「まだ詳しい情報が後ろから足されてくるかもしれないぞ...」という意識で聞き進むことで、後ろから情報が足されてきても、迷子になってしまわずに落ち着いて意味を処理することができます。

But, it has the highest poverty rate in the country. One out of almost two children in Cleveland are now living in poverty.

しかしながら、この街は、貧困率がわが国のなかでも最も高い数字になっています。クリーブランドの約2人に1人に近い子供たちが貧困のなかで暮らしています。

but しかしながら...

**ロジック** プラス側からマイナス側への以降を示す「旗印」表現です。

the poverty rate 貧困率

連邦政府が定める poverty line (最低の生活水準の維持に必要な所得を割り出した数字) を下回る世帯に暮らす人たちの割合。

it has the highest poverty rate 最も高い貧困率である

**やまと言葉** 直訳的には「それは(= Cleveland)貧困率を持っている」ですが、このように「ある」、「いる」は、動詞 to have で言うことができ、その言い方がより自然で、よく使われています。

We have 50 states in the United States. アメリカには50の州があります

one out of almost two children 約2人に1人に近い子供たち

**パターン表現** 割合を示すときのひとつの表現方法です。one out of two 名詞 で「～の半分、～の50%」ということになります。

one out of (every) five people 5人に一人、20%

**ロジック** It has the highest poverty rate の後ろで、聞き手に「貧困率が高い」ことに納得してもらえそうなサポートが入ると、「何か言ったら...サポート!」の典型的な話の組み立てになっています。サポートに移ったことを宣言する「旗印」表現は特に入っていませんが、One out of ...と聞こえてきたところで、「あ、なにかデータを挙げてサポートしてくれるぞ...」と気づけるようになります。

to live in poverty 貧困の中で暮らす

**やまと言葉** 文字通り「貧困の中で暮らす」という意味です。「貧しい生活をおくる」、「貧困の中で暮らす」というときの決まった表現としてよく使われます。